

保育士初任者の「運動あそび」に関する課題意識とニーズ
—「岡崎市定期講座講習」を通して—

Awareness of the Issues and Needs of Beginning Childcare Workers’
“Exercise Through Playing”
—Through the Okazaki City Fixed-Term Course and Training Program—

山田悠莉*・山下 晋*・野田美樹*

YAMADA Yuri, YAMASHITA Susumu, NODA Miki

要 旨：

本研究は、保育士初任者を対象とした「岡崎市定期講座講習あそび講座」において、考案、実践した運動あそびを基にした保育指導計画の作成、事前事後の質問紙調査を通して、受講者の運動あそびに対する意識と課題を把握し、本講座の効果を検証、及び運動あそびに対する興味関心、ニーズ、課題意識を洗い出し、今後の講習に向けての基礎資料を得ることを目的とした。

分析の結果、本講座を通して、運動あそびに対してのイメージの相違が明らかとなり、体力、技能の向上に対しての課題意識やニーズを持っていること、また、運動あそびを工夫する力に意識が向くような講習を展開する必要性が示唆された。加えて、実践時期や内容、対象年齢を配慮した上で、無理のない講習内容の設定が重要であることが理解できた。

Abstract

In “Asobi (Play) Course: Okazaki City Fixed-Term Course and Training Program,” with beginning childcare workers as its target, participants will create and practice a course with exercise through playing. The participants’ awareness of exercise through playing and the issues surrounding it are to be ascertained through the creation of educational childcare lecture plans using exercise through playing, and pre-/post-lecture questionnaires. The lecture’s purpose is to verify its own effectiveness and closely examine admiration for, the needs of, and the awareness of issues regarding exercise through playing, gaining basic data for future courses.

Judging from survey results, there was a need to hold this lecture, which would make the differences of impressions regarding exercise through playing clear, give people an awareness of and feel for the need to improve physical strength and technology, as well as make them aware of the ability to be creative about exercise through playing. In addition, the importance of establishing reasonable content considerate of the period the lecture is held, its content, and age of the target children was recognized.

キーワード：運動あそび、保育実践、保育士初任者、課題意識とニーズ、定期講習

Keywords : exercise through playing, childcare practice, beginning childcare workers, awareness of issues and needs, fixed-term course

I. はじめに

平成 28 年度に開催された「岡崎市定期講座講

習」は、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学と連携協定を締結している岡崎市からの委託事業として開始された。

*岡崎女子短期大学幼児教育学科

女性の社会進出に伴い、保育ニーズが高まる中、保育所・幼稚園等の現場は多忙を極め、本学の立地する岡崎市においても、若い保育者（正規、嘱託経験3年以内）が先輩の保育を観て学び、吸収する経験が不足している現状がある。そのため、保育者が子どもたちとどう関わり、どのようにあそんでよいのかがわからないという悩みを抱えたまま保育職に従事するという事態を招いている。岡崎市に勤務する保育士初任者の講習内容や研修の要望には、「あそびを知りたい」「子どもたちにあそびを伝える方法がわからない」「保育の中にどのようにあそびを取り入れた方がいいのか具体的に知りたい」と、自らが現時点でもち合わせているあそびの支援技術の拡大、活かし方、深め方について戸惑う声が挙がっている。

以上のことから、この講習は2～3年目の保育士初任者を対象として実施され、今年度は「あそび講座」という名称で、実技における「表現領域」を主軸に、運動・音楽・造形に関する活動から、2～3歳のあそびをテーマに掲げ開催された。

講習の目的は、保育士養成課程等検討会による「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」¹⁾に基づき、①保育現場に勤務する保育者も養成校の教員も共に「あそび」について深く考え、理論と実践が結びつく工夫をすること、②保育者と教員が交流することによって、相互に保育現場の現状を理解し、よりよい保育実践をめざしていくこと、③何よりも子どもがもっとあそびたくなる、保育者にとっては組立て甲斐のある保育内容を構築すること、というような①～③の目的を解決するために「あそび」を視点に講習を組み立てた。

講座の担当者には、受講者が講習を受講した後、すぐに明日の保育に参考となる実践的な内容であること、あそびの系統性、継続性に着目できる内容であることなど、できるだけ現場での実践に沿った内容が求められた。講座の担当者は、各分野を専門とする教科担当教員2～3名と保育内容を専門とする保育現場での勤務経験のある教員1名とし、3～4名でチームティーチングを行うこととした。また、内容は実技のみのレクチャーではなく、理論と実践が結びつくように構成していくよう要請がなされた。

本研究では、今後の保育士研修および保育士養成課程における教科内容の充実につなげることを目的とし、保育士初任者の運動あそびに対する課題

意識、ニーズ調査を行うとともに、講座内容が受講者の運動あそびに対する意識にどのような変化を与えたのかを調査し、本講座の効果を検証し、今後の講座開催の為の基礎資料を得ることを重視した。

Ⅱ. 「岡崎市定期講座講習」あそび講習について

1. 講座の概要について（日程及び場所）

第1回：全員参加

平成28年5月20日（金）17:00～19:00

第2回：Aグループ

平成28年6月17日（金）17:00～19:00

第3回：Bグループ

平成28年8月18日（木）17:00～19:00

第4回：Cグループ

平成28年9月9日（金）17:00～19:00

活動場所：岡崎女子大学・岡崎女子短期大学
小体育室及び大体育室

2. 受講者

岡崎市立保育園勤務者73名

（正規2～3年目、臨時的任用1～4年目含む）

3. 講習の内容

講習は全4回の講座で構成された。第1回は福尾野歩氏によるあそび講座、第2～4回は、受講者が3つのグループに分かれ、運動・音楽・造形の各講座をローテーションで受講し、様々な分野が経験できるよう配慮をした。

4. 運動あそび講座の目的

我々は、「岡崎市定期講座講習」の目的を踏まえて、運動あそび講座の目的を以下のように設定した。保育現場の現状を踏まえた上で、理論と実践を結び付けながら、年齢別に応じた運動あそびの工夫を体得すること、また、受講者同士の実践交流、ディスカッション及び発表を通して、運動あそびに対する興味関心を高めると共に、保育者と子どもとが楽しんであそびに取り組むための視座を得ることができるようとした。特に「あそびを工夫、発展させる」という点を意識し、将来的にはあそびが体育科教育につながっていくような系統性、継続性も意識できる内容となるよう配慮し構成をした。

具体的な講習内容は、①指導計画を作成し、勤務先にて実践を行った後に講習に参加する（指導計画を講習前に郵送で提出）、受講者同士で作成した指導計画の共有、②模擬保育、実践紹介を行い、担当者からの助言、あそびの工夫について提案を受ける、③よりよい運動あそびの実践について受講者同士で考える（ディスカッション、発表等）、④講習で得た学びを現場での運動あそびにつなげていけるように配慮した。また、講習の事前と事後に運動あそびに関するアンケートを実施した。講習内容について以下より具体的に記す。

① 指導計画の作成、共有について

現在の勤務先にて2～3歳児を対象に、自らの興味関心を基づき運動あそびの実践を行う。講習の際にあそびについてのディスカッションが円滑に進むよう、テーマや内容については数種類の中から選択できるように設定した。テーマは、「体力・運動技能の向上」「保育者・友だちとのかかわり」「模倣・見立てあそび」の3つ、内容は「ボール」「フープ」「新聞・段ボール」の3つの中から選択し、テーマと内容を自由に組み合わせてよいこととした。また、各々が実践した指導計画は、名前、所属を伏せた状態で、簡単に添削を入れ印刷をし、資料として受講者に配布をした。

② 模擬保育、実践共有、担当者からの助言

講座では各々の実践内容を共有し、それらを基にディスカッションを行い、あそびに対しての理解を深めていく。その上で担当者より「明日の運動あそびをより楽しくするためにはどうすればよいか」というテーマのもと、あそびの工夫、発展について助言を受ける流れを設定した。

③ 受講者同士の学び合い

担当者が考案した運動あそびの提案を実際に経験し、そこで得た助言を参考に、さらに工夫するにはどのような視点が必要かディスカッションを行い、発表を組み合わせながら深めていった。あそびの深め方については、受講者の状況、指導計画の内容に応じて各回によって流れが多少変更になった。

④ 運動あそびに関するアンケート実施

講習の事前、事後に運動あそびに関するアンケートを実施し、同時に講習内容に対する希望、運動あそびに対して困っていること（課題意識）も調査し、受講者の声を講習に反映できるよう配慮した。

Ⅲ. 研究方法

本研究では、保育士初任者の運動あそびについて「実態・興味関心」「ニーズと課題意識」を洗い出すために、3つの観点から情報を整理した。

対象は、本講座の受講者である岡崎市立保育園勤務者（正規2～3年目、臨時的任用1～4年目）73名をとした。

1. 指導計画の分析

受講者から講習前に提出された指導計画をテーマ、内容別に分類し、運動あそびに対する実践、興味関心の傾向について調査を行った。指導計画を通して講習を受ける前の運動あそびの取り組み（受講生自身が持っている興味関心）を受講者の運動あそびに対する意識と読み取り分析を行った。

2. 質問紙調査（講習後の変容）

質問紙調査では、現場で行っている運動あそびの実践に関して、受講者の実態、課題意識を読み取るために調査を行った。質問は行動目標の形式で設定し、質問に対する回答は「とてもできる」「ややできる」「どちらでもない」「ややできない」「全くできない」の5件法で設定し調査を行った。（質問項目については以下表1を参照）

本研究では、有効回答における項目について事前と事後の変容について分析を行った。

3. 質問紙調査（自由記述欄の分析）

以上の3つの観点から、各項目において分析する内容を以下のように設定した。事前調査では、「運動あそびに関わる活動で困った経験はあるか」という項目で自由記述を課し、現在の実態と受講者の課題意識を調査した。事後調査においては、「運動あそびに関して今後学びたいことは何か」という質問項目で自由記述を課し、課題意識とニーズを調査した。

表1 質問紙項目

事前	事後
運動あそびに関わる活動で、困った経験があれば教えてください	講習についての意見、感想 今後受講したい講習
日常の保育の中で運動あそびに関わる活動を取り入れることは？	日常の保育の中で運動あそびに関わる活動を取り入れることは？
運動あそびに関わる活動を取り入れた指導計画を作成することは？	運動あそびに関わる活動を取り入れた指導計画を作成することは？
子どもと運動あそびを楽しむことは？	子どもと運動あそびを楽しむことは？

V. 結果と考察

1. 指導計画の分析

指導計画は、受講した73名全員から提出された。指定されたテーマで実践を行っていたものは69件、課題に即しない形で実践を行った指導計画は4件提出された。

集計の結果、ボールを用いた実践が14件、フープを用いた実践が35件、新聞・段ボールを用いた実践が21件であった。テーマ別にみると体力・運動技能の向上（以下体力・運動技能と記す）をねらいとした実践が15件、保育者・友達とのかかわり（以下かかわりと記す）をねらいとした活動が43件、模倣・見立てあそび（以下模倣・見立てと記す）が14件であった（表2）。

表2 事前課題におけるテーマ及び内容（全体）

（件）

全体	ボール	フープ	新聞 段ボール	その他	合計
体力・運動技能	1	12	2	0	15
かかわり	12	16	14	1	43
模倣・見立て	1	6	5	2	14
その他	0	1	0	0	1
合計	14	35	21	3	73

表3 事前課題におけるテーマ及び内容（Aグループ）

（件）

Aグループ	ボール	フープ	新聞 段ボール	その他	合計
体力・運動技能向上	1	7	1	0	9
かかわり	3	5	3	0	11
模倣・見立て	1	1	3	0	5
その他	0	0	0	0	0
合計	5	13	7	0	25

A、B、C、各グループの事前課題におけるテーマ及び内容を表3、4、5に示した。Aグループ

の事前課題の実施期間は5月28日から6月10日であったが、指導計画に日付未記入のものが11件あったため、すべての指導計画の正確な実施時期は把握することができなかった。提出された指導計画は、フープを用いた活動、かかわりをねらいとした活動が多く実践されていた。指導計画の活動内容を分析してみると、フープを用いて体力・運動技能をねらいとした活動が7件あったが、7件中6件が同じあそびであった。他にも、フープを用いてかかわりをねらいとした活動が3件あったが、すべて同じ活動であった。同じ指導計画が複数枚提出された背景には、受講者は指導計画を作成する際に、保育雑誌や教則本などの何らかの情報を参考にしていることが推測できる。Aグループの受講者に対して、担当者から「それらを参考にすることは悪くないが、実際の子どもの様子を踏まえて情報を工夫する力、どこかに自分らしさを取り入れながら指導計画を作成してほしい」と、あそびを工夫するよう助言が行われた。それを受け、担当者から、運動あそびの工夫についての実践例がいくつか提示され、例を参考に、受講者は講習を通してあそびの工夫について学びを深めた。

表4 事前課題におけるテーマ及び内容（Bグループ）

（件）

Bグループ	ボール	フープ	新聞 段ボール	その他	合計
体力・運動技能	0	4	1	0	5
かかわり	6	5	4	0	15
模倣・見立て	0	2	2	1	5
その他	0	1	0	0	0
合計	6	12	7	1	26

Bグループは6月18日から7月27日までに実践した指導計画が提出された。Bグループでは、課題に則さない形の指導計画（テーマが異なるものの、指定された道具を用いていないもの）が2件提出された。また、Aグループと同様に、日付未記入の指導計画が6件提出された。

Bグループは、かかわりをテーマとした活動が多く、道具もAグループと同様にフープを用いた活動が多かった。内容を見てみると、室内あそびが多く、新聞やボール運びなどを用いて遊戯室で展開される活動が多くみられた。このことは、実践期間が雨季を挟んでいたためか季節を意識し、室内活動が多く展開されていたことが推測できた。Bグループではボールを用いて、かかわり

をテーマとしたあそびが多く提出されたが、その内6件中4件が同じ内容の指導計画であった。Aグループ同様、あそびの工夫の乏しさが見えた。

表5 事前課題におけるテーマ及び内容 (Cグループ) (件)

Cグループ	ボール	フープ	新聞 段ボール	その他	合計
体力・運動技能向上	0	1	0	3	4
かかわり	3	6	7	1	17
模倣・見立て	0	3	0	1	4
その他	0	0	0	0	0
合計	3	10	7	5	25

Cグループでは、8月22日から9月9日まで実践を行った指導計画が提出された。今回はA・Bと異なり新聞・段ボールを用いた活動が7件と多かったが、A・Bグループ同様、7件中6件が同じあそび内容の指導計画が提出された。フープを用いてかかわりをテーマにした活動については、プールで行った水あそびであり、Bグループの室内活動同様、季節に合わせたあそびを展開していることが読み取れた。また、課題に則さない形での指導計画が5件と3グループの中では最も多く提出された。

以上のことから各グループの傾向を分析すると、フープに次いで新聞・段ボールが多く実践されていた。ボールが少なかった背景として、ボールを実践した受講者の振り返り（指導計画に記載されたもの）に、「対象年齢が2、3歳児ということでボールをどう扱ってよいか難しかった」という声があったことからボールを使ったあそびについては、「投げる」動作を中心に考えてしまい2、3歳児には難しいと敬遠したのではないかと推測された。しかし、ボールは「転がす」「渡す」など様々な使い方を工夫することができる点や、大きさや形状、素材を工夫することで2、3歳児でも楽しめるあそびが展開できるものである。運動あそびを技術中心で捉えず柔軟な発想で様々な角度から捉えることができるように指導する必要がある。

加えて、同じあそび内容の指導計画が同時期に提出された背景には、保育雑誌や、資料を参考に指導計画を立案しているようであり、文章の表現や展開の類似点も多く見られた。資料を参考にしより深く学びたいという受講者の意欲の表れとも取れるが、資料から得た情報をそのまま受け、

子どもの実態に即した形であそびを工夫する発想を持ち合わせていない、工夫する力の弱さを感じる結果となった。一方で、よい面としては、雨季の室内あそびや、夏季のプールあそび等季節を感じたあそびをうまく取り入れながら指導計画を立案している様子が見られた。内容に即さない形の指導計画が提出されたことに関しては説明と受講者の解釈に対して課題が残った。

2. 質問紙調査の結果

質問紙調査では、質問項目での有効回答は73件であり、自由記述については、事前68件、事後72件の回答を得た。質問項目は①日常の保育のなかで、運動あそびに関わる活動を取り入れることは？②運動あそびにかかわる活動を取り入れた指導計画を作成することは？③子どもと運動あそびを通して楽しむことは？の3つとした。

質問項目1に対する事前・事後の結果を図1に示した。

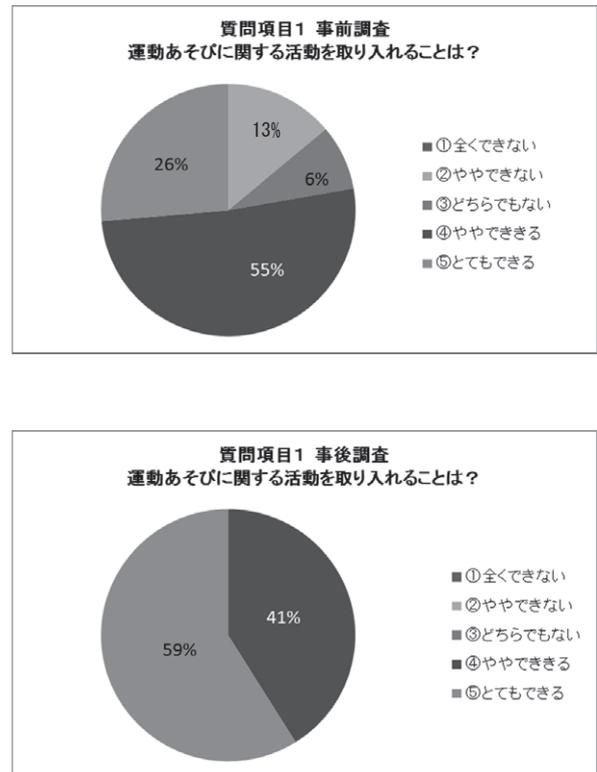


図1 質問項目1に対する回答の割合

事前では「ややできない」「どちらでもない」と答えた受講者が19%いた。一方、事後の質問に対しては、すべての受講者が「ややできる」と

てもできる」と回答していた。「ややできない」、「どちらでもない」と回答していた受講者が、講習を経験したことで運動あそびに対しての苦手意識や難しさを軽減し、興味関心を持つことができたと思われた。この結果は、講習で行った他の受講者の運動あそびの紹介、模擬保育、ディスカッションや担当者による助言が効果的に働いたことが予想される。受講者は今回のあそび講座を通して、運動あそびの捉え方を見直し、講習を通して「あそびを工夫する・発展させる」という考え方を学び、自信を得たことで講習を受講する前よりも運動あそびに対する視野が広がった可能性が考えられた。

質問項目2に対する事前・事後の結果を図2に示した。

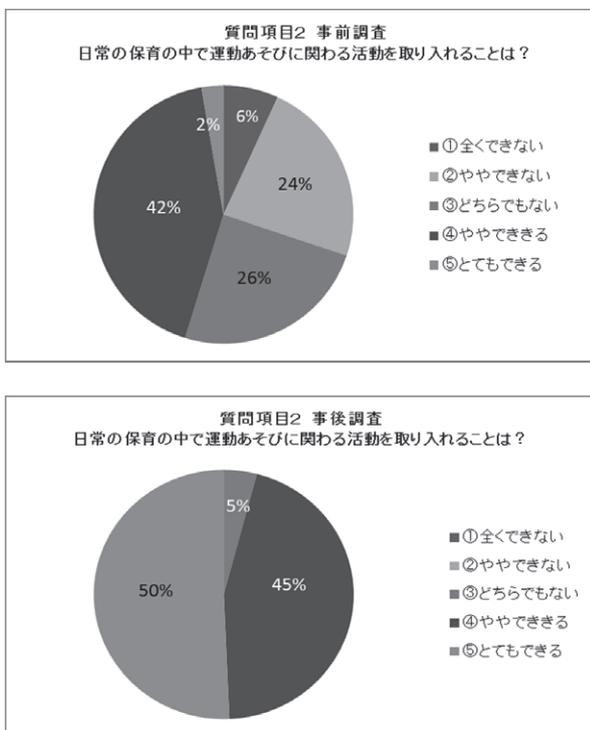


図2 質問項目2に対する回答の割合

事前の調査では、「とてもできる」と回答した受講者は2%しかおらず、「ややできる」の回答も42%と半数以下であった。このことから、受講者である保育士初任者は、運動あそびを保育の中に取り入れることや、子どもと運動あそびを通して遊ぶことに対応できても、運動あそびの指導計画を立案することに対して苦手意識を持っていることが明らかとなった。一方で講習後の事後の調査結果では、「とてもできる」「ややできる」と

回答した受講者が95%と大きく増えた。これは、質問項目1でも示したように講習によって運動あそびに取り組み、考えたこと、立案した指導計画に対してフィードバックがなされたこと、自分の運動あそびを工夫し発展させる方法について学びを得たことで、運動あそびに対して視野が広がったこと推測できる。講習の際には、「あそびを深めること、あそびについて語り合うこと自体が新鮮」「身体を動かすあそびは色々な方法があると知った」という気づきを口にしてしている様子もあった。運動あそびの種類を紹介するだけの講習ではなく、今回のように指導計画の作成からあそびを発展させ、今後の現場での実践へとつなげるような講習を展開したことが、日常の保育の中で指導計画を作成しよう、作成できそうという意識の高まりに繋がり、さらに実践への動機づけにもつながる可能性が示唆された。

特に講習の後半に行った受講生同士のディスカッションでは、現在自分が担当している子どもの年齢やあそびの様子を例に挙げながら、楽しそうに互いのアイデアを共有する姿がみられた。その際に担当者らが「実際子どもたちはどのような反応や展開が考えられるか」など、子どもの姿を例に出しながら活発に意見交換ができるように支援したことで、使用する環境、教材に対してまで話が広がり、充実したディスカッションがなされていた。

質問項目3に対する事前・事後の結果を図3に示した。

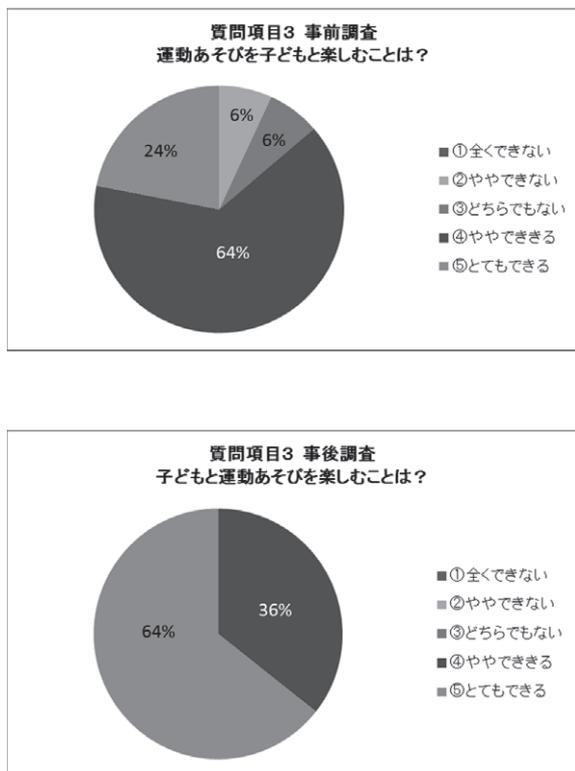


図3 質問項目3に対する回答の割合

事前では「ややできる」「できる」と回答した受講者が88%であり、「全くできない」「ややできない」の回答者は事後調査では一人もいなかった。このことから、講習を受けたことで、運動あそびを行うことに対する自信がさらに高まったことが考えられる。その自信の背景には講習で得た知見をもとにより楽しい活動をしてみたい、できそう、やってみたいという興味関心の高まりも感じ取ることができた。

3. 自由記述内容の分析

(1) 事前調査

事前調査の自由記述欄は、受講者に対して「運動あそびに関わる活動の中で困ったことがあれば教えてください」といった質問事項に対して、自由に回答するよう求めたところ、73件中68件の記述があった。回答を整理し、頻出する内容を大きく分類すると、①鉄棒、跳び箱等の技術指導に関するもの、②運動あそびが得意、不得意な子への対応、③運動あそびのレパートリーの少なさ(特に乳児に対して)の3つが多く挙げられた。

①鉄棒、跳び箱等の技術指導に対しては多くの受講者が「跳び箱援助の仕方がわからない、知りたい」「逆上がりの指導の仕方」「跳び箱が上達する段階的な練習」と記述しており、正しい援助の方法、技術指導のコツを身に着けたいという強いニーズを持っていることが明らかとなった。

②運動あそびが得意、不得意な子に対する対応については、「子どもの個人差にどう対応していくのか」「興味を持たない子にどう声をかけてよいか」「嫌がって取り組んでくれない」など、運動の不得意な子、興味を持たない子に対する動機付けを課題と感じていることが挙げられた。と同時に、「自分が苦手なので指導、援助の方法が難しい」という自らの運動あそびに対する意識を課題と感じている声もあった。

③運動遊びのレパートリーについては、特に乳児に対して課題を感じている声が多く、「0、1歳児に対してどんな運動あそびがよいか」「2歳児はどこまでできるのか、経験が少なく分からない」等の意見があった。

①と③については、今回は対象年齢が2、3歳児であったことから、2・3歳児の子どもたちの現状と「鉄棒・跳び箱の技能習得」についての課題意識に些かのギャップを感じた。この受講者の「技能習得」を意識している背景には運動あそびが充実するということが、何かが出来ようになるという結果について強く意識が向いているのではないかという印象を受けた。例えば、低年齢児は鬼ごっこを楽しむことで身体を思い切り動かし、走る技術などを自然に身につけたりしている。乳幼児期に必要な経験としてのあそびが技能習得につながっているのではなく、切り離されている印象を受けた。

(2) 事後調査

「講習を受けた感想および今後の講習への期待、希望」について「あそびを工夫するという視点がよかった」「あそびを広げる楽しさを知った」という声が多くあった。特に「一つのアそびをそこで終わりにするのではなく、教材やルールを工夫し、あそびを発展させることが大切と学んだ」という意見が挙げられ、今回の講習での運動あそびを考える活動を通して、我々が当初設定した講座のねらいが受講者に伝わっている様子が読み取れた。

また、「ディスカッションが楽しかった」「運動

あそびをもっと保育の中に取り入れてみたい」「他の園の先生と交流できてよかった」といったように、受講者が本講座自体を楽しめたこと、あそびについて深く考え、交流する経験が新鮮であったことも窺え、本講座の一連の活動が今後の保育への動機づけとなっている様子も伝わってきた。

また、講習後に受講者に質問を受け付けた際には、事前調査でも頻出していた鉄棒、跳び箱の指導方法について質問があった。そのことに対する講師からの助言や指導が印象に残っているようで、自由記述欄に「鉄棒、跳び箱の指導方法についてもっと詳しく聞きたかった」「指導方法が勉強になった」との記述があった。

更に、「今後受講したい内容」について「鉄棒、跳び箱、ボール投げ等の技術指導」、「運動あそびのレパートリーを増やしたい」という声があげられた。少数ではあるものの、「運動あそびの指導計画の立案方法」をより詳細に知りたいという声もあった。受講者が講習を経て子どもの体力や運動能力に対して興味関心を持っていること、そこから発展して指導方法に対して課題意識を持ちより学びたいという意識を持っていると感じられた。

以上のことから、事前、事後共に鉄棒や跳び箱の援助の方法等、技術指導の知識を得たいというニーズがある中で、「運動あそびを工夫、発展させる」という講習内容を通して運動あそびの捉え方が拡がり、あそびを工夫し発展させる楽しさを学ぶことができたのではないかと推測できた。そのことにより、より現場での実践に対しての意欲が高まったことが読み取れ、この意欲の高まりについては講習の一定の成果として捉えることができた。また、事前の自由記述では運動あそびの得意・不得意への対応に苦慮している様子を表す意見が出たが、事後調査で行った今後受講したい内容には挙げられなかったことから、講習を受講することで、それらに対応する糸口を受講生自身が見いだしたのではないかと考えられる。

Ⅵ. まとめ

本研究は、保育士初任者を対象とした「岡崎市定期講座講習あそび講座」において行った運動あそび講座が、受講者の運動あそびに対する意識にどのような変化を与えたのか本講座の効果を検証

した。同時に事前に提出された指導計画、質問紙調査から保育士初任者の運動あそびに関する「実態・興味関心」「ニーズと課題意識」について分析を行った。

今回の講座を受講した保育士初任者の運動あそびに関する実態・興味関心については、鉄棒や跳び箱などの技術指導、運動が得意、不得意に対する支援、あそびのレパートリーの拡がりを期待していることから、運動あそびに対する捉え方の狭さを読み取ることができた。その理由として、事前調査において、技能習得の方に意識が向いている意見が多数あったことが挙げられるが、その背景として、運動あそびという言葉に対するイメージが狭義であったことが推測できる。事後調査で「日常の保育に取り入れることができる」という自信を得たことから、講習を経てあそびに対しての視野が広がったことも要因のひとつではないかと考えられる。また、身近な教材であるフープや新聞を用いた実践を多く行っていること、指導計画の立案の際には参考資料を用いる等、苦慮している様子もあったものの、講習で得た「あそびを工夫することの大切さ」を通してそれらの興味関心をより深め、指導計画の立案に自信を得たのではないかと考えられる。

次に、ニーズと課題意識に対しては、跳び箱や鉄棒の援助などの技術面の指導を学びたいという気持ちを持っている反面、事前課題における自らの指導計画、実践では「かかわり」や「模倣・見立て」などの経験を子どもたちにしてほしいという願いを持っていることが明らかとなった。これらの結果からは、これからの成長過程に向けて技能習得を意識したあそびを低年齢児の段階からどのように取り入れていくべきかを考えているようにも捉えることができた。

今回は2、3歳児を対象とした講習であったことから、かかわりから生まれるあそびの楽しさを取り入れた指導計画の立案が多くなされたことから、保育の継続性、連続性を意識した上での運動あそびの支援を模索しているようにも感じることができた。しかしながら、受講者自身がその継続性や継続性を明確に意識できていない可能性もあるが、今回のあそびの工夫・展開を意識した講習を経ることで、あそびの捉え方が拡がり、自らもち合わせている技術の活かし方、深め方の一助となったのではないだろうか。

また、事前のアンケートには、嫌がる子や苦手意識をもっている子に対する援助方法が分からないといった意見も多かったことも視野に入れ、今後は、発達に即した形での技能習得やあそびの拡がりと一緒に、動機づけについてもカバーできるような内容が求められてくるであろう。これらの視点を大切に、本研究で得た資料を基に保育士研修や保育士養成課程における教科内容の充実に繋げていきたいと考えている。

Ⅶ. 今後の展望

今回の研究を通じて、今後の講習を行うための基礎資料を得ることができた。受講者の運動あそびに関する実態、興味関心、ニーズと課題意識に対しての一傾向を捉えることができたと考えられる。今後講習を行う際には、講習依頼者より受講者の情報を得て、受講者が抱えている課題をよく把握した上で、ニーズと、講習のねらいとのバランスをよく見極めながら、理論と実践をうまく配分し展開することが求められるであろう。

特に、運動あそびの講習においては、事前に受講者が運動あそびに対してどのような考え方や捉え方をしているのかをしっかりと把握することが必要であることが理解できた。加えて、現場と連携させた形で行う場合は、課した課題の内容、取り組む対象年齢を配慮した上で、無理のない講習内容の設定を行いたい。その配慮が欠けると、受講者の意欲の低下にもつながる恐れがあることも念頭に置き、受講者の立場に立った講習を展開していきたい。

謝辞

本研究の実施に当たり、質問紙調査にご協力頂きました、岡崎市役所保育課の方々、また「岡崎市定期講座講習」の運営統括をしてくださった岡崎女子大学矢藤誠慈郎先生、大岩みちの先生に深くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 保育士養成課程等検討会『保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）』（2010）

参考文献

- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』（2008）

- ・厚生労働省『保育所保育指針解説書』（2008）

執筆分担

運動あそび講座担当者：山下、野田、山田

質問紙作成 野田

質問紙調査 山下

データ入力 山田

執筆箇所

1. はじめに（山下・山田）
2. 研究の方法（山田）
3. 結果と考察（山田）
4. 今後の展望（野田・山田）

